

中学生用共感的感情反応尺度の予備的検討^{1, 2)}

筑波大学大学院人間総合科学研究科 村上 達也・西村多久磨³⁾・

倉住 友恵・鈴木 高志・葉山 大地

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 櫻井 茂男

A Pilot Study of the Empathic-Affective Response Scale for Middle School Students

Tatsuya Murakami, Takuma Nishimura, Tomoe Kurazumi, Takashi Suzuki and Daichi Hayama
(Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan)
Shigeo Sakurai (Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences,
University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan)

There were three purposes of this study. First one is to develop the Empathic-Affective Response Scale for Middle School Students (EARS-MSS) and to confirm the factor structure of EARS-MSS. Then, the relationship between envy and empathic-affective reactions was investigated in order to examine discriminative validity. Finally, the influence of empathic-affective reactions on prosocial and aggressive behaviors was explored. One hundred and ninety six middle school students participated. As results, factor analysis revealed that EARS-MSS constructed from three factors: (a) empathy towards other's positive affections (positive empathy), (b) sharing of other's negative affections (negative sharing) and (c) sympathy towards other's negative affections (sympathy). These subscales had high reliability. Partial correlation analysis revealed that envy was negatively correlated with positive empathy and positively correlated with negative sharing. Regression analysis indicated that positive empathy has the positive potential of restraining overt aggressive behaviors, whereas sympathy has the positive potential of promoting prosocial behaviors.

Key words: empathy, empathic-affective response, prosocial behavior, aggressive behavior

問題と目的

中学生における“いじめ”の問題が、重大な社会

問題として取り上げられて久しいが、今なお学校現場において大きな問題であり続けている。文部科学省(2009)の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、中学校におけるいじめの認知件数は36,795件であり、小学生から高校生までの学年別の推移をみても、中学1年生と2年生において、非常に高くなっている。これらを受けて、文部科学省はいじめ対策としてさまざまな対策を挙げており、その中の教育的指導として“他者への思いやり”を促進することが繰り返し挙げられている(文部科学省, 1996, 2006)。

“いじめ”や“他者への思いやり”に対応する心

- 1) 本研究は、平成22年度科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号21530676 代表:櫻井茂男)の助成を受けた一連の研究の1つである。
- 2) 本論文は27th International Congress of Applied Psychology in Melbourne, Australia および日本教育心理学会第52回総会(自主シンポジウム:新しい共感性研究—ポジティブな共感的感情反応に着目して—)で、著者らにより発表された内容を再分析したものである。
- 3) 日本学術振興会特別研究員。

理学的概念として、攻撃行動や向社会的行動がある。Crick (1996) や Crick, Ostrov & Werner (2006) では、時が経っても児童の攻撃行動は減少せず、時間的な安定性を持っていることが示されており、攻撃行動抑制のための介入の必要性が説かれている。さらに Crick (1996) では、攻撃を行い、かつ向社会的行動をあまり行わない子どもは将来、社会的不適応を起こすことが示されている。また、上述したように学年が進行しても攻撃行動は減少しないが、向社会的行動は減少することが明らかにされている (Midlarsky & Hannah, 1985)。

これらの研究から、中学生という時期は攻撃行動が減少しない一方で、向社会的行動が減少していく時期であり、将来的には社会的不適応を起こす生徒が増加することも予想される。“いじめ”を減少させるため、かつ、“いじめ”を行っている加害生徒の社会的適応を促すためにも、攻撃行動を抑制し、向社会的行動を促進するような要因を早急に検討する必要がある。

そこで本研究では、対人関係において向社会的行動を促進したり、攻撃行動を抑制する要因として、共感性 (empathy) を取り上げる。共感性とは、他者の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念であり、他の人の視点に立つことができるなどの認知的な要素と、他の人と同じ感情になれるなどの感情的な要素から構成される (Davis, 1994)。先行研究において、共感性は攻撃行動を抑制し (Endreson & Olweus, 2001; Miller & Eisenberg, 1988; 櫻井, 1991)、向社会的行動を促進すること (Eisenberg & Miller, 1987; Roberts & Strayer, 1996; 櫻井, 1986) が示されている。また、中学生を対象とした研究である本間 (2003) でも、いじめ加害者に対しては感情面にまで踏み込んだ共感性を高める取り組みが重要であると指摘されている。

しかし、これまでの共感性研究は、他者のネガティブな感情・経験に対する共感性について研究されることがほとんどであった (e.g., 葉山・植村・萩原・大内・及川・鈴木・倉住・櫻井, 2008; 福島, 2009)。共感性の研究において近年注目されているのは、共感性の感情的要素にあたる“他者のポジティブな感情に対する共感性”である (e.g., 橋本, 2005)。他者のポジティブな感情に対する共感性とは、他者の喜びや満足に対して、その感情を共有する、あるいはその感情に反応することを意味する。杉山 (1995) は、喜びに対する共感性と悲しみに対する共感性では発達過程に違いがあることを指摘しており、葉山ら (2008) は、社会的スキルと他者のポジティブな感情に対する共感性および他者のネガ

ティブな感情に対する共感性との関連の強さが異なることを論じている。これらから、共感性の感情的要素である、他者のネガティブな感情に対する共感性と他者のポジティブな感情に対する共感性の両方の側面から、攻撃行動および向社会的行動との関連を検討する必要があると考えられる。

ポジティブな感情への共感性を含んだ共感性の尺度として、葉山ら (2008) や植村・萩原・及川・大内・葉山・鈴木・倉住・櫻井 (2008) の共感性プロセス尺度、橋本 (2005) の肯定・否定感情に着目した共感性尺度などがある。葉山ら (2008) や植村ら (2008) では、共感性の感情的側面について“感情の共有か他者志向的反応”とポジティブかネガティブかという“感情の方向性”という2つの観点から4つの下位尺度 (“ポジティブな感情の共有”, “ネガティブな感情の共有”, “ポジティブな感情への好感”, “ネガティブな感情への同情”) を構成している (Fig. 1)。植村ら (2008) では、他者のポジティブな感情に対する共感性は、他者のネガティブな感情に対する共感性とは独立に、向社会的行動と関連していることが示されている。

しかし、葉山ら (2008) や植村ら (2008) においては、概念の弁別性に関する問題が存在する。第1は、両研究において“感情の共有か他者志向的反応”という観点が統計的に検討されていない点である。葉山ら (2008) および植村ら (2008) では、“感情の共有”の水準の項目群と“他者志向的反応”の水準の項目群を個別に因子分析しており、それらが因子的に弁別されるかどうかの検討が行われていない。また、共感的感情反応尺度の下位尺度“ポジティブな感情の共有”と“ポジティブな感情への好感”の相関係数が高く、統計的に弁別される可能性は低いと考えられる。

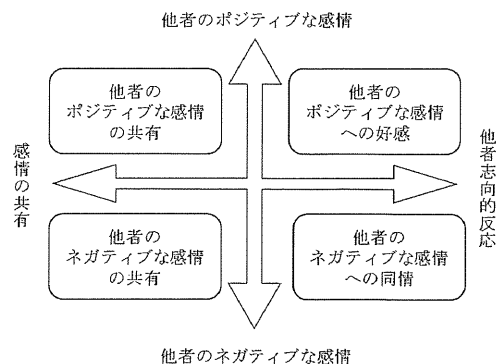


Fig. 1 葉山ら (2008) による共感的感情反応の概念的枠組み

第2に、葉山ら(2008)では社会的スキルとの相関から弁別的妥当性を論じているが、社会的スキルに関してはすべての下位尺度間で正の相関が得られており、その関連の方向性は異なっていない。また、植村ら(2008)における向社会的行動との関連に関しても、他者のポジティブな感情に対する共感性は、他者のネガティブな感情に対する共感性とは独立に向社会的行動と関連していることを示したものの、他者のポジティブな感情に対する共感性の独自性を示すにはいたらなかった。

新たな概念を提出する際に重要になるのは、他の概念との弁別性、言い換えるならばその概念の独自性であり、他者のポジティブな感情に対する共感性に関してもそれが検討される必要がある。

以上のことから、本研究の目的は、第1に中学生における共感的感情反応尺度を作成し、葉山ら(2008)が想定した4概念に関して因子的な弁別性を検討することである。すなわち、共感性の感情的側面を“感情の共有か他者志向的反応”と“感情の方向性”という2つの観点から捉え、4因子が見出せるかを検討することである。感情の共有とは、他者の抱いている感情と同じ感情状態になることを指す。一方、他者指向的反応とは、他者の抱いている感情状態に対して、何らかの感情反応を向けることを意味する。また、感情の方向性はポジティブな感情価とネガティブな感情価のことを意味する。なお、共感性に関しては、男性よりも女性の方が高い(Bryant, 1982; 出口・斎藤, 1991)という従来からの知見を踏まえ、本尺度でも同様の結果が得られるかどうか、構成概念妥当性の検討を行う。

第2に、概念の独自性の検討として、共感的感情反応と妬みとの関連を検討する。澤田(2006)では、妬みは自分に類似した他者の成功体験を知ったとき、その他者の状態と自分の状態を対比的に捉えた際に生起する感情であることが論じられている。また、山本(2005)においても、他者にとってのよい出来事に対して、他者と同じ感情を感じることを共感的喜び、対比的な感情を感じることを妬みとして概念的な位置づけを行っている。これらから、他者のポジティブな感情に対する共感性と妬みの間には負の相関があると予測される。したがって、妬みと共感的感情反応の相関を検討することによって、概念の独自性の検討を行う。

第3に、共感性と向社会的行動、攻撃行動との関連を検討する。上述した知見から、共感性は向社会的行動に対し正の関連をみせ、攻撃行動に対し負の関連をみせると予想される。攻撃行動に関しては、従来取り上げられていた身体的攻撃と、近年注目さ

れている相手の人間関係を故意に操作したり、破壊することによって相手を傷つけようとしたりする関係性攻撃(Crick & Grotpeter, 1995)という2側面から捉える。これらの関連を検討するなかで、他者のポジティブな感情に対する共感性が、弁別的に他の変数と関連するかどうかを探索的に検討する。

方 法

調査協力者

関東の中学校1校の中学生227名を対象に調査を行った。有効回答数は196であった。内訳は、中学1年生65名(男子33名、女子32名)、中学2年生65名(男子37名、女子28名)、中学3年生63名(男子31名、女子32名)、不明3名であった。有効回答者のうち、99名が下記の質問紙ver. Aに、97名が質問紙ver. Bに回答した。

調査時期

調査は2009年の6月下旬に実施された。

調査内容

(1) **中学生用共感的感情反応尺度原案** 共感性プロセス尺度(葉山ら, 2008)の項目を中学生にも理解が可能な表現に修正した。さらに想定された4つの下位概念(他者のポジティブな感情の共有、他者のポジティブな感情への好感、他者のネガティブな感情の共有、他者のネガティブな感情への同情)がより反映されるように項目内容を再修正した。最終的に中学生用共感的感情反応尺度原案43項目(他者のポジティブな感情の共有10項目、他者のポジティブな感情への好感11項目、他者のネガティブな感情の共有11項目、他者のネガティブな感情への同情11項目)を作成した。回答方法は、“とてもあてはまる(5点)”, “ややあてはまる(4点)”, “どちらともいえない(3点)”, “あまりあてはまらない(2点)”, “まったくあてはまらない(1点)”の5件法であった。

(2) **妬み傾向** 妬み傾向を測定するために、妬み傾向尺度(澤田・新井, 2002)から4項目を抜粋し使用した。項目は“なんでも上手にすぐできる人を見るのは不満です”などであった。回答方法は、“はい(5点)”から“いいえ(1点)”までの5件法であった。

(3) **向社会的行動** 向社会的行動を測定するために、中高生版向社会的行動尺度(横塚, 1989)から4項目を抜粋し使用した。項目は“友だちの悩みを聞いたり、相談相手になってあげた”などであった。回答方法は、“いつもした(5点)”から“したことがない(1点)”までの5件法であった。

(4) **攻撃行動** 攻撃行動を測定するために、小

学生用 P-R 攻撃性尺度 (坂井・山崎, 2004) の下位尺度 “関係性攻撃”, “表出性攻撃” からそれぞれ 4 項目, 計 8 項目を抜粋し使用した。項目は “誰かを仲間はずれにしたことがある”, “人に乱暴なことをしたことがある” などであった。表出性攻撃下位尺度からは, 身体的攻撃に対応すると考えられる項目のみを抜粋し, “身体的攻撃” として扱うこととした。また, これらの項目は, 本来は攻撃性を測定する尺度ではあるが, 項目表現が “したことがある” という攻撃経験を尋ねる形式であったため, 攻撃行動として扱うこととした。回答方法は, “とてもあてはまる (4 点)” から “まったくあてはまらない (1 点)” であった。

調査手続きおよび倫理的配慮

調査は各学級担任に依頼し, 学級ごとに実施された。なお, 回答者の回答への負担を軽減するために, 2 種類の質問紙を作成し実施した。質問紙 ver. A には (1) 中学生用共感的感情反応尺度原案, (2) 妬み傾向, (3) 向社会的行動を, 質問紙 ver. B には (1) 中学生用共感的感情反応尺度原案, (4) 攻撃行動を掲載した。

結 果

中学生用共感的感情反応尺度原案の因子分析 中学生用共感的感情反応尺度の因子構造を検討するために, 作成した予備項目 43 項目に対して主因子法による探索的因子分析を実施した。固有値 1 以上の因子が 6 因子存在したため, 順に因子数を減らし, 因子の解釈可能性から 3 因子解を採択した。次いで, 因子数を 3 に設定し, 主因子法プロマックス回転により再度因子分析を実施した (Table 1)。

第 1 因子は, 他者のポジティブな感情の共有の項目と他者のポジティブな感情への好感の項目が高く負荷していることから “他者のポジティブな感情への共感 (以下, ポジ共感)” と命名した。第 2 因子は, 他者のネガティブな感情への同情的項目が高く負荷していることから, 想定通り “他者のネガティブな感情への同情 (以下, ネガ同情)” と命名した。第 3 因子は, 他者のネガティブな感情の共有の項目が高く負荷していることから, 想定通り “他者のネガティブな感情の共有 (以下, ネガ共有)” と命名した。それぞれの因子に対して負荷量の高い上位 9 項目を本項目 (下位尺度項目) として採用することとした⁴⁾。

各因子に対し因子負荷量の高い上位 9 項目から構

成された各下位尺度得点の平均 (標準偏差) は, ポジ共感が 3.10 (0.98), ネガ同情が 3.30 (0.89), ネガ共有が 2.61 (0.85) であった。Cronbach の α 係数は, ポジ共感が .91, ネガ同情が .90, ネガ共有が .87 であり, 各下位尺度の内の一貫性が確認された。また, 各下位尺度において t 検定を用いて男女差の検討を行ったところ (Table 2), すべての下位尺度において, 女子は男子より得点が高いことが示された。

妬み傾向尺度の検討 妬み傾向尺度 (澤田・新井, 2002) から抜粋した 4 項目に対して主成分分析を行った。その結果, 全ての項目が第 1 主成分に .75 以上の負荷を示し, 一次元性が確認された。妬み傾向尺度の平均値 (標準偏差) は 2.82 (1.16), α 係数は .87 であった。

向社会的行動尺度の検討 中高生版向社会的行動尺度 (横塚, 1989) から抜粋した 4 項目に対して, 主成分分析を行った。その結果, 全ての項目が第 1 主成分に .75 以上の負荷を示し, 一次元性が確認された。向社会的行動尺度の平均値 (標準偏差) は 2.94 (1.10), α 係数は .88 であった。

攻撃行動尺度の検討 小学生用 P-R 攻撃性尺度 (坂井・山崎, 2004) から抜粋した 8 項目に対して下位尺度毎に主成分分析を行った。“関係性攻撃” に関しては全ての項目が第 1 主成分に .75 以上の負荷を示し, 一次元性が確認された。同様に “身体的攻撃” に関しては全ての項目が第 1 主成分に .70 以上の負荷を示し, 一次元性が確認された。平均値 (標準偏差) は “関係性攻撃” で 2.30 (0.79), “身体的攻撃” で 2.74 (0.78), “関係性攻撃” の α 係数は .84 で, “身体的攻撃” では .83 であった。

相関分析 各変数間の関連を検討するために, 相関分析を行った。中学生用共感的感情反応尺度の下位尺度内では, 中程度の正の相関がみられた (.65 ~ .71)。また, ネガ共有, ネガ同情と妬み傾向の間に正の相関がみられた (.26 ~ .43)。一方, ポジ共感と妬み傾向の間には有意な相関はみられなかった (Table 2)。さらに, ポジ共感, ネガ共有, ネガ同情と向社会的行動の間には中程度の有意な正の相関がみられた (.51 ~ .58)。そして, ポジ共感, ネガ同情と身体的攻撃の間に弱い有意な負の相関がみられた (-.23 ~ -.24)。また, ポジ共感, ネガ共有, ネガ同情と関係性攻撃の間には, 有意な相関はみられなかった (Table 3)。

次に, 中学生用共感的感情反応尺度の下位尺度の弁別的妥当性を検討するために, ポジ共感, ネガ共有, ネガ同情と妬み傾向の偏相関を算出した (Table 2)。偏相関の算出にあたっては, 目標の下位尺度以外の 2 下位尺度を統制した。その結果, ポジ共感と

4) 上位 9 項目のみで因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った結果, 同様の 3 因子が得られた。

Table 1 中学生用共感的感情反応尺度予備項目の因子分析結果（主因子法，プロマックス回転， $N = 196$ ）

No.	項目	F1	F2	F3
ポ共有 3:	そばにうれしそうにしている人がいると、自分もうれしくなる	.97	-.13	-.02
ポ共有 2:	よいことがあって喜んでいる人を見ると、自分も喜びを感じる	.95	-.06	-.21
ポ共有 1:	楽しそうに笑っている人を見ると、自分も同じように楽しくなる	.89	.02	-.25
ポ共有 5:	喜んでいて人を見ると、自分もいっしょに喜びたい気分になる	.85	-.06	.10
好感 2:	幸せそうな人たちを見ると、ほんわかした気持ちになる	.77	-.07	.13
ポ共有 6:	毎日が充実して幸せそうな人といっしょにいと、自分も幸せな気分になる	.76	-.10	.15
ポ共有 7:	わくわくしている人を見ると、自分もわくわくしてくる	.71	.05	.06
好感 4:	ほめられてうれしそうにしている人を見ると、よかったなあと思う	.70	.07	.05
好感 11:	授業で、作品がうまくできて満足そうにしている人を見ると、すごいなあと思う	.69	.09	-.03
ポ共有 8:	幸せそうな人がそばにいと、自分も幸せな気持ちになる	.68	-.05	.23
好感 9:	楽しそうに話している人たちを見ると、ほほえましい気持ちになる	.68	.12	.01
ポ共有 4:	テストの点が思ったより良くて、うれしそうにしている人を見ると、自分もうれしくなる	.66	-.33	.23
好感 5:	まわりの人の幸せそうなようすを見ると、あたたかい気持ちになる	.65	.24	-.02
ポ共有 10:	楽しみにしていることがあって、うきうきしている人を見ると、自分までうきうきしてくる	.61	-.05	.20
好感 1:	努力がみのって喜んでいて人を見ると、よくがんばったなあと感心する	.59	.42	-.23
好感 3:	成功して喜んでいて人を見ると、すごいなあと思う	.57	.47	-.32
好感 8:	楽しそうにがんばっている人を見るのが好きだ	.55	.17	.01
好感 6:	苦手だったことができるようになって喜んでいて人を見ると、やるなあと感心する	.49	.37	-.01
好感 7:	落とし物が見つかってうれしそうな人を見ると、よかったなあという気持ちになる	.44	.16	.24
好感 10:	好きなことに熱中して楽しそうな人を見ると、すばらしいなあと思う	.43	.37	-.02
ポ共有 9:	そばにいて人の感動しているようすを見ると、自分もなんだか感動する	.40	.07	.32
ネ共有 10:	試合で負けてくやしがつている人を見ると、自分も同じようにくやしい気持ちになる	.27	.20	.21
同情 2:	つらそうにしている人を見ると、大変だなあと思う	-.16	.97	-.16
同情 6:	冷たくされている人を見ると、かわいそうになる	-.12	.78	.11
同情 4:	そばにいて人が落ちこんでいと、気のどくだなあと思う	.02	.70	.01
同情 3:	無理してがんばっている人を見ると、心配な気持ちになる	.13	.64	.01
同情 5:	こまっている人を見ると、大変だなあと思う	-.06	.62	.20
同情 11:	つらいことがあって悲しんでいる人を見ると、かわいそうだなあと思う	.01	.51	.29
同情 10:	がんばっていたことがうまくいかなくて、がっかりしている人を見ると、気のどくに思う	.13	.50	.15
同情 8:	けがをして痛そうにしている人を見ると、気のどくに思う	.08	.50	.14
同情 9:	火事や地しんにあってこまっている人を見ると、同情の気持ちがわいてくる	.03	.45	.24
同情 1:	問題がとげずにこまっている人を見ると、かわいそうに感じる	-.07	.37	.25
ネ共有 4:	まわりの人がいやな気持ちになると、自分もいやな気持ちになる	.20	.34	.21
同情 7:	大切にしていた物をなくして悲しんでいる人を見ると、その人に同情する	.26	.31	.20
ネ共有 9:	なやみがあって暗くなっている人といっしょにいと、自分も暗い気持ちになる	-.06	-.02	.82
ネ共有 3:	そばにいて人が落ちこんでいと、自分も同じように落ちこんだ気持ちになる	.07	-.08	.68
ネ共有 2:	一人でさびしそうにしている人を見ると、自分もさびしくなる	.07	.08	.64
ネ共有 6:	意見を聞いてもらえなくてイライラしている人を見ると、自分も同じようにイライラする	-.17	.01	.58
ネ共有 1:	不安を感じている人がそばにいと、自分も同じように不安な気持ちになる	-.13	.18	.58
ネ共有 5:	つらそうにしている人といっしょにいと、自分もその人と同じようにつらくなる	.28	-.02	.55
ネ共有 8:	そばにいて人が何かをこわがっていると、自分も同じようにこわくなる	.10	.01	.55
ネ共有 7:	悲しんでいる人といっしょにいと、自分も同じように悲しくなる	.27	.15	.49
ネ共有 11:	ひどいことを言われておこっている人がいと、その気持ちが伝わって、自分もおこりたくなる	-.09	.33	.41
因子間相関		F2	.73	
		F3	.69	.73

注 1) 各因子に対し負荷量の高い上位 9 項目（太字）を本項目として採用した。

注 2) F1：他者のポジティブな感情への共感、F2：他者のネガティブな感情への同情、F3：他者のネガティブな感情の共有

注 3) No. についている「ポ共有」などの表現は以下のことを示す。

ポ共有：他者のポジティブな感情の共有、好感：他者のポジティブな感情への好感、ネ共有：他者のネガティブな感情の共有、同情：他者のネガティブな感情への同情

Table 2 中学生用共感的感情反応尺度の *t* 検定による男女差の検討と他の変数との相関係数および偏相関係数

	男性		女性		<i>t</i> 値	ネガ共有		ネガ同情		妬み傾向	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		<i>r</i>	<i>r</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>		
ポジ共感	3.10	.98	3.61	.95	3.72 **	.65 **	.69 **	.10	-.32 *		
ネガ共有	2.61	.85	3.22	.78	5.24 **	—	.71 **	.43 **	.46 **		
ネガ同情	3.30	.89	3.75	.80	3.79 **	—	—	.26 **	.01		
<i>N</i>	101		92			196	196	99	99		

注1) *pr* は共感的感情反応尺度の他の2下位尺度を統制した偏相関係数を表わす。

注2) ***p* < .01, **p* < .05.

注3) ポジ共感：他者のポジティブな感情への共感，ネガ共有：他者のネガティブな感情の共有，ネガ同情：他者のネガティブな感情への同情

は負の偏相関係数が (-.32)，ネガ共有とは正の偏相関係数が (.46) 得られたが，ネガ同情とは有意な偏相関係数は得られなかった。

重回帰分析 共感的感情反応と向社会的行動，攻撃行動との関連を検討するために重回帰分析を行った (Table 3)。向社会的行動に対しては，ネガ同情から正のパス (.60) がみられた。身体的攻撃に対しては，ポジ共感からのみ負のパス (-.26) がみられた。関係性攻撃に対しては，有意なパスは得られなかった。

考 察

本研究の目的は，(1) 中学生用共感的感情反応尺度を作成すること，(2) 共感的感情反応尺度の理論的枠組みである“感情の共有と他者指向的反応”と“感情の方向性”という2つの観点から想定された4つの下位概念の独自性を妬みとの関連から検討すること，(3) 向社会的行動および攻撃行動への影響から探索的に各概念の独自性を検討することであった。

まず，中学生用共感的感情反応尺度の作成については，作成された予備項目に対する因子分析の結果 (Table 1)，想定された4因子を得ることはできずに3因子を抽出した。他者のネガティブな感情に対する共感性に関しては，想定通り，感情の共有と他者指向的反応で因子的に弁別することができたが，他者のポジティブな感情に対する共感性に関しては，弁別することができなかった。3つの下位尺度に関しては，高い内的一貫性が認められ尺度の信頼性が確認された。また，男女の得点の比較から，女性の方が共感性得点は高い (Table 2) という構成概念妥当性も確認された。

想定された4因子を抽出することができずに3因子を採択したことに関しては，2つの可能性が考えられる。1つ目は，尺度項目の問題である。予備項目

Table 3 ステップワイズ法による重回帰分析の結果

	向社会的行動		身体的攻撃		関係性攻撃	
	β	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β	<i>r</i>
ポジ共感	.51**	-.26**	-.24*		-.07	
ネガ共有	.53**		-.19		-.01	
ネガ同情	.60**	.58**	-.23*		-.03	
<i>N</i>	99		97		97	
<i>R</i> ²	.37**		.07*			

注1) β の欄の空欄は，ステップワイズ法により除外されたことを表わす。

注2) ***p* < .01, **p* < .05.

注3) ポジ共感：他者のポジティブな感情への共感，ネガ共有：他者のネガティブな感情の共有，ネガ同情：他者のネガティブな感情への同情

を作成する際に，“他者のポジティブな感情の共有”は他者と同じ感情反応であること，“他者のポジティブな感情への好感”は他者のポジティブな感情に対するポジティブな感情反応であること，という概念定義の下，それぞれ明確に概念定義が反映されるように項目を作成した。しかし，それでも調査対象者には二つの概念が弁別されなかった。本研究では，他者のポジティブな感情への好感を表わす表現として，“よかったなあ”や“ほんわかった気持ち”を採用したが，これらが好感の表現として適切であるか，さらに検討をする必要がある。

2つ目は，そもそも他者のポジティブな感情の共有と他者のポジティブな感情への好感という2概念の弁別が可能であるかどうか，という問題である。2概念を弁別する感情の共有と他者指向的反応の区別は，相手の感情状態との類似性によって決定される。なぜなら，他者の感情状態と同じ感情価の感情反応を他者に向ける，という概念定義のためである。他者と同じ感情を抱けば，感情の共有に，他者と異なるが類似した感情を抱けば，他者指向的反応に該当する。したがって，2概念が弁別されるため

には、ある程度の感情の種類が必要となる。しかしながら、ポジティブな感情に関しては感情の種類は比較的少ないことが明らかにされている。例えば、Woodworth (1938) では、様々な表情の顔写真のカテゴリ判断を行い、愛、歓喜、嬉しさといったポジティブな感情が1つのカテゴリにまとめられた。一方、驚き、恐れ、苦しみ、怒り、嫌悪といったネガティブな感情はそれぞれ個別のカテゴリとなり、計6種類の感情を見出した。ここでは、ポジティブ感情の弁別性が低いことが明らかにされている。またEkman (1992) の基本的感情においても、喜び、驚き、悲しみ、怒り、恐れ、嫌悪という分類がなされ、ポジティブな感情の弁別の難しさが示されている。しかるに、ポジティブな感情における感情の共有と他者指向的反応は類似度が高く、理論的な弁別は可能であっても、実際にそれらを弁別することは難しいのではないかと考えられる。しかしながら、今回の因子分析の結果を精査すると、ポジティブ感情に対して、他者のポジティブな感情に対する共有の項目がより高い負荷量を示しており、他者のポジティブな感情への好感の項目は相対的に低い負荷量を示していることから、今後項目をさらに精選することによって、2因子に分離する可能性は残されていると考えられる。

次に、3下位尺度と妬みとの関連に関して、目標となる下位尺度以外の2下位尺度を統制した偏相関係数を算出した結果、ポジティブ共感とは負の偏相関係数が、ネガ共有とは正の偏相関係数が得られ、ネガ同情とは有意な関連は見られなかった (Table 2)。ポジティブ共感と妬みとの間には負の偏相関係数がみられ、概念の弁別の妥当性が確認された。すなわち、ポジティブ共感が妬みを抑制することが実証され、ポジティブ共感の有効性が示されたといえよう。一方、ネガ共有と妬みとの間にみられた正の偏相関係数は、山本 (2007) における、ある他者に不幸が生じた際、過去にその他者の幸福を妬んだとしても、その不幸を共に悲しむ傾向が得られた、という結果と一致する。山本 (2007) は、他者の不幸を喜ぶというシャーデンフロイデとの対比から、人は基本的に他者の不幸に際し、本研究で言うところのネガ共有を行う傾向があるためではないかと考察しており、この結果もそのような傾向の表れであると考えられる。

最後に、共感的感情反応の向社会的行動および攻撃行動に対する影響に関しては、向社会的行動に対してネガ同情から正のパスが、身体的攻撃に対してポジティブ共感から負のパスがみられた。一方、関係性攻撃に対しては、どの共感的感情反応からも有意なパスはみられなかった (Table 3)。

向社会的行動に関しては、従来検討されてきた他者のネガティブな感情に対する共感性が向社会的行動に影響を及ぼすという知見が再現された。また、他者のネガティブな感情に対する共感性のなかでも、他者指向的反応こそが向社会的行動を説明し、感情を共有するだけでは向社会的行動を説明しないことが明らかになった。これは植村ら (2008) と同様の結果であった。このことから、他者の感情状態に対し、感情の共有をするだけでなく、他者指向的な反応もすることが向社会的行動の生起には重要であることが示されたといえる。しかし、本研究では、植村ら (2008) と異なりポジティブ共感からのパスはみられなかった。ただし、相関分析においては、各共感的感情反応と向社会的行動の間に正の関連がみられており、ポジティブ共感が向社会的行動に与える影響に関しては、今後より詳細な検討が必要であろう。

身体的攻撃に関しては、ポジティブ共感だけが独自にそれを抑制するという結果が得られ、ポジティブ共感の概念の弁別性が確認された。従来研究では、共感性を感情の方向性という観点からは捉えていなかったが、尺度項目にいくつか他者のポジティブな感情に対する共感性が含まれていた (e.g., 桜井, 1991)。したがって、本研究では、従来の知見を踏襲しながらも、それが感情の方向性によって弁別されるという新たな知見を明らかにし、感情の方向性を踏まえる必要性が確認されたといえる。いじめを減少させるための教育的介入を行う場合には、ポジティブ共感に働きかけることが有効であることが示唆された。

その一方で、共感性と負の関連が予想されていた関係性攻撃に関しては、有意な関連はみられなかった。従来、共感性と攻撃性は負の関連がみられることが示され (桜井, 1991; Endreson & Olweus, 2001)、理論的にも共感性がどのように攻撃行動を抑制するかが検討されてきた (Feshbach, 1978; Miller & Eisenberg, 1988)。しかし、これらは身体的攻撃のような直接的あるいは反応的攻撃を中心に扱った研究・理論であり、関係性攻撃のような間接的あるいは道具的攻撃に関しては、まだ知見が少ない。関係性攻撃のような不表出性攻撃を行う非行少年サンプルと統制群の間には、共感性に差がないとする研究 (Lee & Prentice, 1988) も存在しており、共感性と関係性攻撃の間には関連がないという可能性も考えられる。今後、攻撃行動に関する直接的と間接的、反応的と道具的という枠組みで、それぞれ共感性がどのように影響を及ぼしているかの検討が必要となるであろう。

本研究の限界として、まず、共感的感情反応尺度の因子間相関の高さが挙げられる。妬みとの関連や

身体的攻撃との関連において概念的な弁別性は明らかにされたものの因子的な弁別性に関しては因子間相関が高く、弁別性が低かった。したがって、因子的弁別性に関して、再検討が必要であると考えられる。

次に、妬み傾向尺度、向社会的行動尺度、攻撃性尺度のいずれに関しても、項目を短縮して用いたことが挙げられる。各尺度の項目を抜粋して使用したために、その概念を正確に測定できていない可能性があり、共感的感情反応尺度との関連については、すべて一定の留保を持って解釈されるべきであろう。特に、従来の研究から予測された共感的感情反応尺度と関係性攻撃の関連については、より詳細に検討を行う必要があるであろう。

また、中学校1校における検討であったために、学校の特性も反映されているかもしれない。したがって、より多くのサンプルでこれらの結果が再検討される必要がある。

最後に、中学生用共感的感情反応尺度は、妥当性の確認された大学生用の尺度の項目を修正して使用しているものの、妥当性の検討が不十分である。より精度の高い尺度にするために、広く妥当性の検討を行うことが望まれる。

しかし、本研究では、一定の留保を含みながらも、中学生を対象とした他者のポジティブな感情に対する共感性を含む共感性研究の端緒として、その概念の独自性、有用性を示すことができたといえる。中学生の“いじめ”を代表とした攻撃行動を抑制する、他者のポジティブな感情に対する共感性を育てることが、有効なアプローチに成り得る可能性が示されたため、今後はさらに、他者のポジティブな感情に対する共感性についての研究知見を蓄積することが望まれる。

引用文献

- Bryant, B.K. (1982). An index of empathy for children and adolescents. *Child Development*, **53**, 413-425.
- Crick, N.R. (1996). The role of overt aggression, relational aggression, and prosocial behavior in the prediction of children's future social adjustment. *Child Development*, **67**, 2317-2327.
- Crick, N.R. & Grotpeter, J.K. (1995). Relational aggression, gender, and social psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- Crick, N.R., Ostrov, J.M. & Werner, N.E. (2006). A longitudinal study of relational aggression, physical aggression, and Children's Social-psychological Adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **34**, 131-142.
- Davis, M.H. (1994). Empathy: A social psychological approach. Westview Press. (菊池章夫(訳)(1999). 共感の社会心理学 川島書店)
- 出口保行・斎藤耕二(1991). 共感性の発達の研究 東京学芸大学紀要第1部門, **42**, 119-129.
- Eisenberg, E. & Miller, P.A. (1987). Empathy and prosocial behavior. *Psychological Bulletin*, **101**, 100-131.
- Ekman, P. (1992). An argument for basic emotions. *Cognition and emotion*, **6**, 169-200.
- Endresen, I.M. & Olweus, D. (2001). Self-reported empathy in Norwegian adolescents: Sex differences, age trends, and relationship to bullying. In A.C. Bohart & D.J. Stipek (Eds.), *Constructive & destructive behavior: Implications for family, school, & society* (pp. 147-165). Washington, DC: American Psychological Association.
- Feshbach, N.D. (1978). Studies of empathic behavior in children. In B.A. Maher (Ed.), *Progress in experimental personality research*. Vol.8 (pp. 1-47). New York: Academic Press.
- 福島宏器(2009). ポジティブ経験に対する共感開 一夫・長谷川寿一編 ソーシャルブレイン 一自己と他者を認知する脳 東京大学出版会, pp. 214-215.
- 橋本秀美(2005). 肯定・否定感情に着目した共感性尺度の開発 心理臨床学研究, **22**, 637-647.
- 葉山大地・植村みゆき・萩原俊彦・大内晶子・及川千都子・鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂男(2008). 共感性プロセス尺度作成の試み 筑波大学心理学研究, **36**, 39-48.
- 本間友巳 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究, **51**, 390-400.
- Lee, M. & Prentice, N.M. (1988). Interrelations of empathy, cognition, and moral reasoning with dimensions of juvenile delinquency. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **16**, 127-139.
- Midlarsky, E. & Hannah, M.E. (1985). Competence, reticence, and helping by children and adolescents. *Developmental Psychology*, **21**, 534-541.
- Miller, P.A. & Eisenberg, N. (1988). The relationship

- of empathy to aggressive and externalizing/antisocial behavior. *Psychological Bulletin*, **103**, 324-344.
- 文部科学省 (1996). いじめの問題に関する総合的な取組について 文部科学省 1996年7月26日 <http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19960726001/t19960726001.html> (2010年9月30日)
- 文部科学省 (2006). いじめの問題への取組の徹底について (通知) 文部科学省 2006年10月19日 <http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/06102402/001.htm> (2010年9月30日)
- 文部科学省 (2009). 平成20年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果 (小中不登校等) について 文部科学省 2009年8月6日 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/08/1282877.htm> (2010年9月30日)
- Roberts, W. & Strayer, J. (1996). Empathy, emotional expressiveness, and prosocial behavior. *Child Development*, **67**, 449-470.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004). 小学校用 P-R 攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 心理学研究, **75**, 254-261.
- 桜井茂男 (1986). 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, **34**, 342-346.
- 桜井茂男 (1991). 攻撃性と共感による攻撃行動と向社会的行動の予測—児童用の新攻撃性尺度を用いて— 奈良教育大学紀要, **37**, 149-153.
- 澤田匡人 (2006). 子どもの妬み感情とその対処—感情心理学からのアプローチ 新曜社.
- 澤田匡人・新井邦二郎 (2002). 妬みの対処方略選択に及ぼす, 妬み傾向, 領域重要度, および獲得可能性の影響 教育心理学研究, **50**, 246-256.
- 杉山憲司 (1995). 共感性と愛他行動の発達 二宮克美・繁多 進 (編) たくましい社会性を育てる有斐閣選書, pp. 69-82.
- 植村みゆき・萩原俊彦・及川千都子・大内晶子・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂男 (2008). 共感性と向社会的行動との関連の検討—共感性プロセス尺度を用いて— 筑波大学心理学研究, **36**, 49-56.
- Woodworth, R.S. (1938). *Experimental psychology*. Henry Holt and Company, New York.
- 山本良子 (2005). 「三項関係情動」の生起メカニズムを探る—共感的喜び・妬みの状況要因について— 京都大学院教育学研究科紀要, **51**, 371-385.
- 山本良子 (2007). 他者の不幸を悲しむ情動, 喜ぶ情動: 面接調査から把握されたその実態 京都大学院教育学研究科紀要, **53**, 273-285.
- 横塚怜子 (1989). 向社会的行動尺度 (中高生版) 作成の試み 教育心理学研究, **37**, 158-162.
(受稿9月30日: 受理10月20日)